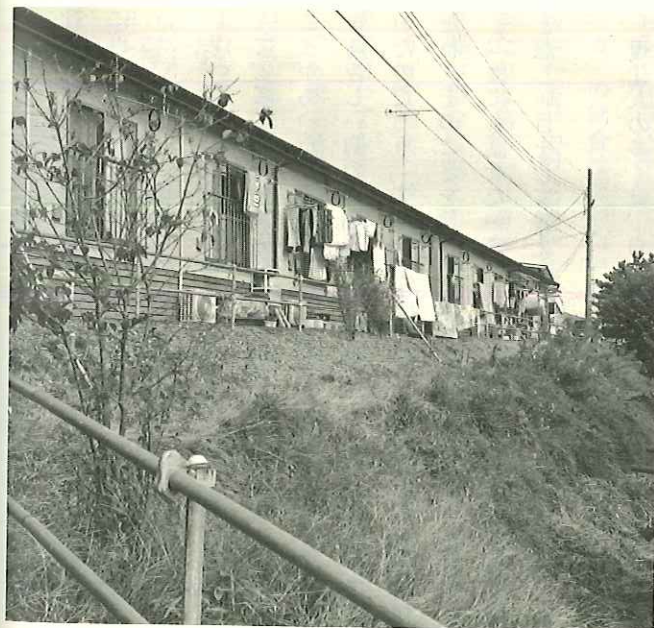


「縁」を再構築する役割を担う事が、これからの宗教者の役割ではないかと私は考えている。そもそも、宗教が持っている智慧は、日常的な物の考えが通用しない震災時などでは、力になりうると私は感じている。少子化に伴

い、お寺の数は今後激減していくことは確実である。葬式法事以外に、お寺や僧侶の存在が人々の心の拠り所となり、家族・地域・会社に代わる第四の縁を構築できるかどうか？ 今は、瀬戸際といってもよいだろう。



支援する宗教者

主の十字架の立つところ

——カトリック信徒の回心の記録@釜石

CLC被災地支援デスク・SIGN—SJAPAN会員・カトリック信徒

林里江子

はやし りえこ

一年八ヶ月目

大槌町に入ると、見渡す限り、建築構造物は見当たらない。茫漠とした更地が広がっている。これは震災半年目くらいからは変わらないう。いくつか残って、修復されたビルもあるが、多くは取り壊されて、土台のみが残っている。その、大槌の「原野」の向こうに目立つのは小槌川防潮水門である。明治二九年の三陸沖大津波を考慮して構築されたという水門で、潮高六・四メートルに耐えられる構造ということだが、今回、この地点では一・一mの潮高を記録したそう。津波は軽々と防潮水門を超

えたが、しっかりした構造だったため、ガラスや橋げたの破損はあったものの、水門自体は壊れていない。それゆえ、すべてが壊れてしまった大槌の原野で、水門だけが変わらずに立つ風景は、二〇一一年の五月に初めて来たときから印象的だった。

その水門に行ってみたいと言う思いはあったが、行くところではないかと思っていたのが正直なところである。ところが、二〇一二年の五月に何度目かに来た時、水門のすぐ下を走るダンプを見た。そしてその先の山肌むき出しの赤土が見えて、なにか補修工事が始まっていることがわかった。水門に行けるかもしれないと思ったが、

行く勇気が無かった。今回、初めから水門を目指していたわけではない。いつものように、赤浜にいくつもりだった。しかし、前を走るタンブが右折のランプを点灯させると同時に、私もハンドルを右に切っていた。

水門の近くに車を停めて、小槌橋を渡る。

鉄製の欄干はぐにやりと曲がっている。水門の管理棟に上る階段室のガラスは割れて、そのままで。入口にはロープが張られていて入れない。私は何としても水門に上ってみたかったので、小槌橋をゆっくりと渡りながら水門周辺を観察した。橋を渡り切って、堤防が大きく崩れているところがあった。その間には土砂が入り込んで雑草が生えている。私はその土を踏みしめて、堤防の上にあがり、そこから水門のカーテンウォールという海側に構築された防潮機能を持つ部分、幅が1mほどの「橋」によじ登った。すぐ右側は海。左には小槌橋の向こうに大槌の原野が広がっている。両脇に何のフェンスもないのは心細いものだ。折りから岩手沿岸部は強風注意報、そして昨日は大潮であった。

後戻りはできない。ただ前に進むしかなくなぜここを

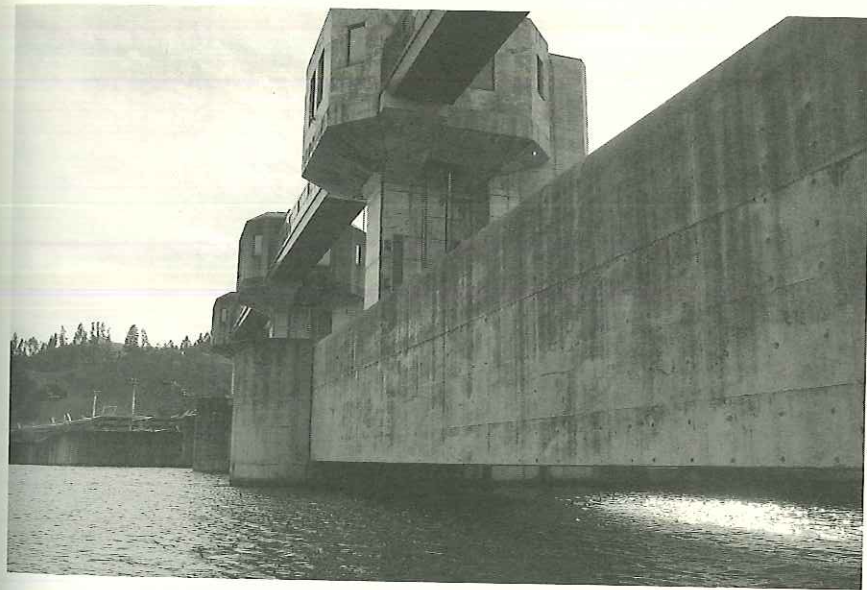
渡るかと言えば、それは写真を撮るためだったので、強風の中、転落をも覚悟して振り向き、立ち止まり、シャッターを押した。

ここは、二百人以上のご遺体があがった場所だということ。ここから海側を眺めると、大槌の集められた瓦礫の山がうずたかく赤浜地区に積み上げられているのが見える。ウォーターフロント、生と死の水際、境目、いろんな言葉が脳裏をかすめたが、渡り切って、ふと眼下の海を見たら、大きな鮭の死骸が浮いていた。

一年八ヶ月たって、私は初めて、この、最前線に立った。今まで見えていなかったこと、知ろうとしなかったこと、手探りだったことがたくさんあるのだろうが、生と死の境目に立って、当事者性をほんの少し共有できたのかもしれないと思った。死が隣にある、という生々しい感覚は、被災地と関わって、初めて感じたことだったから。

壊れる現実・壊れる私

二〇一一年三月一日午前中、私は乃木坂にある美術



館でシュルレアリスム展を見ていた。

わけのわからない芸術。それがそれまでの私のシュルレアリスムへの感想であったのだが、なぜかこの日はひどく心が動いた。私なりのシュルレアリスムの解釈は、西欧の伝統、常識、すべてのあたりまえの現実が壊れたことだと思った。それはすなわち、キリスト教的価値観の崩壊。厳然たるヒエラルキー、そして掟の数々、その中から捕られている人々の人生がまったくボウダーレスなものになってしまった、と感じた。これはカトリック信徒として生きる私にはかなり衝撃的な体験だったというより、思わず後ろを振り返るような、見てはいけないものを見てしまったような衝撃だったのだ。——カトリックという安定した価値観の中で、カトリックの空気を吸い、当たり前のように掟を生きる「わたし」が壊れてしまう。そんな不安を覚えたのだった。(この場合の掟とは、所謂カトリック教会のカテキズムにのっとった信者らしい生活、と言う意味だが)

そして、いくつか用事を済ませての帰途、地下鉄の車内で一四時四六分が来たのだった。